# 「探究型学習を推進するために高校図書館ができること ～実践につなげるためのワークショップ～」報告

滝　口　智　子　（信州大学附属図書館）

平成 29 年 9 月 21 日（木）、信州大学附属図書館（以下、「当館」）の中央図書館を会場として、平成 29 年度長野県立高等学校学校司書研修会「探究型学習を推進するために高校図書館ができること～実践につなげるためのワークショップ～」（以下、「当研修会」）が開催された。当研修会は、主催者である長野県教育委員会から当館へ講師の依頼があったことをきっかけに、共催することとなったものである。本稿では、研修の内容や当日の様子について報告する。

## 1. 共催にあたって

平成 28 年 3 月に、高大接続システム改革会議「最終報告」[1] が公表され、これからの高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜全体について、新たな姿が提言された。

その中で、すべての人が身に付けるべき「学力の 3 要素」として、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、が挙げられている。

これらの力は、一方的な知識の伝達にとどまる授業だけでは身に付けることができないため、高等学校教育においても、アクティブ・ラーニングの手法を用いた授業が重視されることとなる。それに伴い、教育をサポートする組織である高等学校図書館（以下、「高校図書館」）に求められる機能についても、改めて考えることが必要となっている。

このような中、大学図書館として今回のような研修会を共催し、地元の高校図書館及び学校司書をサポートすることは、人材育成の面から地域へ貢献できるものであり、高等学校教育と大学教育の円滑な接続を図る上でも、意義があると考える。

## 2. 研修の内容

当初依頼された研修内容は、情報リテラシー教育を中心に「図書館入試」、「アクティブラーニング」といった内容も含めた講義であったが、ワークショップ形式とすることを当館から提案し

た。

また、内容の詳細を検討するにあたり、研修担当の学校司書の方 2 名と事前打合せを行った。この際、高校図書館との今後の連携やサポートを考慮し、県立長野図書館にも当研修会への協力を依頼し、事前打合せから参加していただいた。また、当日もファシリテーターとしてグループワークをサポートしていただくこととなった。

事前打合せでは、長野県の高校図書館の現状と課題、高校図書館・学校司書の「なりたい姿」を踏まえ、研修会で学びたいこと・体験したいこと及び研修のゴールと実現方策について意見交換を行った。

その結果、それぞれの高等学校の特徴や、図書館の立場、司書の身分問題などで、一律のゴールを目指すことは難しいが、自分の学校なりのニーズをとらえ、何か実践できることを持ち帰ってもらうことを研修全体の目標とし、ワークショップについては、疑似的な課題解決と、自分たちができる情報リテラシーについて、それぞれ取り組むのが良いのではないかということになった。

また、グループワークで使用する課題解決のテーマ及びグループ分けは、実情に即したものであることが望ましいため、研修担当の学校司書の方に作成していただくこととなった。グループ分けにあたっては、地域的に近かったり、同じ悩みを持つ同士を組み合わせることを意識していただいた。

最終的に決定した研修の内容は以下のとおりである。研修自体をアクティブ・ラーニング型で行い、さまざまなアクティブ・ラーニングの手法・考え方を体験する機会とした。

①レクチャー（45 分）
「今、大学図書館の現場で起こっていること～学習・教育支援の実際～」
②グループワーク前半（90 分）
「「課題解決」ワークショップの体験」
③グループワーク後半（80 分＋発表 40 分）
「これからトライする「情報リテラシー」」

当日は、県内各地から高校図書館の司書 72 名が参加した。以下に概要と様子を述べる。研修内容の詳細については、講師の当日の発表資料[2)]を参照されたい。

### 3. レクチャー

当館の管理課長森いづみが講師となり、「今、大学図書館の現場で起こっていること～学習・教育支援の実際～」と題し、情報リテラシー教育や学習支援について、大学図書館の動向を紹介した。

場所は「セミナー室」で行った。ここは通常 75 席を設置し、ガイダンス・講演会・ワークシ

ョップなどで使用している。

グループワークに時間を多く配分するため、当レクチャーは、研修の趣旨を伝える「導入」と位置付け、背景や体系的な話はなるべく短くすることとした。また、「研修で聞きたいこと」として要望のあった「図書館入試」については、反転授業の考え方を取り入れ、「知識の伝達」はなるべく事前に行うこととし、参加者に事前課題に取り組んでいただいた。

事前課題の内容は、指定された「図書館入試」に関する資料をあらかじめ読み、高校現場の図書館司書として、「図書館入試」に生徒を送り出す側として、必要と思う要素を 3 つ考えてくるというものであった。

レクチャーではこれを材料として、ペアワーク（図 1）を行った。座席のテーブルごとに 3 人一組となり、自己紹介も含めて 1 人 1 分で考えてきたことをシェアした後、いくつかのグループに内容を発表をしていただき、その内容を講師が取り上げつつ全体で考えた。

一方的に講師の話を聴くだけではなく、インタラクティブな（双方向性のある）活動を多く取り入れた内容となり、参加者がアクティブ・ラーニング型の研修に慣れるためのウォーミングアップにもなったのではないかと思われる。

**図 1　ペアワークの様子**

## 4. グループワーク

事前にレクチャーの中で、グループワークのプロセス例として、以下の 5 つを示した。

①課題の認識、アプローチの検討
②事実や事例の確認（情報探索と入手）
③解決策の検討（入手した情報の評価・検討・咀嚼→アイデア出し・情報共有）
④ストーリーの組立・執筆
⑤発表

場所は「共同学習スペース」で行った。ここは通常、会話をしながら学習することができるスペースとして、学生によく利用されている。

1 グループの人数は 6 名とし、12 グループに分かれてワークを行った。各グループにホワイトボードを 1 台用意し、全員が向き合って話ができるよう、テーブルと椅子を配置した。

各グループには、ネットワーク接続されたノートパソコンを 1 台用意し、自由に使用していた

だいた。この他に、希望者にはタブレットの貸出も行った。さらに、ネットワーク接続のためのIDと手順書を各グループに配布し、持ち込みのスマートフォンなどでも情報探索できるようにした。

また、ファシリテーターとして、県立長野図書館及び当館の職員が、随時助言等を行った。

### 4-1. グループワーク前半

「「課題解決」ワークショップの体験」と題し、プロセス例の①～③を実践した（図2）。③のプロセスでは、ジグソー法を意識して進めていただいた。

課題解決のテーマは全部で7つで、「長野県として観光立県をめざすためにするべきことは」「長野県でも増えている空き家対策についてどう考えるか」など、地域に関するものであった。

情報探索にあまり時間をかけられないため、当館の職員が待機して質問を受け、配架場所などを案内した。統計書や新聞（バックナンバー、データベース）について質問されることが多かった。タブレットの使い方についても質問を受けたが、実際に学校の授業で使用する際は、ある程度慣れた端末を使用するほうが時間のロスがないのではないかと感じた。

**図2　グループワークの様子**

疑似的に、実際に生徒が体験するような流れを自分で体験してみることにより、生徒や先生の視点からの気づきが得られたのではないかと思われる。

### 4-2. グループワーク後半

昼休憩をはさみ、グループワーク後半として、「これからトライする「情報リテラシー」」と題し、プロセス例の①～⑤を実践した。ラウンドロビンの考え方で全員が発言するようにした。

まず、課題の認識として前半の振り返りを行った。課題解決ワークショップをしてみて、どんな問題があったか、何が必要だったかを話し合った。

次に、事実や事例の確認として、実践例を共有した。既に実践していることをメンバー間で共有し、良いところを互いに取り入れた。

次に、解決策の検討として、アイデア出し・情報共有を行った。効果的な探究型学習を進めるため高校図書館ができることについて、アイデアや必要な要素を付箋に書き出した。付箋に書いたアイデアや要素のグルーピングを行ったり、模造紙やホワイトボードを活用して議論を進めた。

次に、ストーリーの組立・発表準備を行った。自分たちが考えたアイデアや必要な要素をまと

め、人に 3 分で伝えるためのストーリーを組み立てた。

発表は、「セミナー室」に戻り、1 グループ 3 分で行った。各班の成果物（パワーポイントや、模造紙・ホワイトボードを撮影したもの）をスクリーンに投影し、グループの全員が前に出て行った。予定時間をオーバーしてしまったが、講師によるコメントをはさみつつ、全員でアイデアを共有することができ、活気あふれる場となった。

## 5. おわりに

内容が盛りだくさんであったため、消化不良に終わらないか心配もあったが、参加者からは、「発表までが大変だったが、収穫の多い研修だった」「多種多様な図書資料や PC などを使えるので、信大図書館が会場で良かった」「職場に帰ったら早速トライしてみたい」といった感想が見られ、好評であった。

学校司書と連携しての高大接続の試みは、当館にとっても新たな取り組みとなったが、今あるリソースを生かし、アクティブ・ラーニングの場、蔵書やデータベース、タブレットなどの機器類、人的サポートを提供することができた。また、研修会を開催する側になる機会もあまりないため、いい経験となった。ファシリテーターを担ったが、声かけのタイミングや話す内容などが難しく、個人的には十分な対応ができなかった。同内容の研修を、自館の職員を対象として実施してみるのも、研修のブラッシュアップとなるのではないかと感じた。

当研修会が、参加された学校司書の皆様にとって、前向きな一歩を踏み出すためのきっかけとなったことを期待する。当館としても、今回の研修によって生まれたネットワークを今後に生かし、よりよい高大接続につなげていきたい。

最後に、当研修会を開催するにあたってご協力いただいた関係者の皆様に、心より御礼申し上げる。

---

**注**

1）文部科学省（2016）「高大接続システム改革会議「最終報告」」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf（参照 2017-12-27）

2）森いづみ（2017）「探究型学習を推進するために高校図書館ができること：実践につなげるためのワークショップ」　（平成 29 年度長野県立高等学校学校司書研修会発表資料）
http://hdl.handle.net/10091/00019833